

# 『式子内親王集』A百首における『伊勢物語』受容の方法

北原 沙友里

## はじめに

古歌の一部を利用する詠法は『万葉集』にすでに見られるが、古歌の表現技法を有効的に活用し、自覚的手法として用いられるようになるのは新古今時代になってからである。<sup>1)</sup>新古今時代、多くの歌人が本歌取りを用いて歌を詠んでいる。また、本歌取り同様、物語を本説とする本説取りの歌も多く詠まれた。<sup>2)</sup>その背景には、建久四年(一一九三)の『六百番歌合』の「枯野」における藤原俊成の判詞「紫式部、歌詠みの程よりも物書く筆は殊勝也。其上、花の宴の巻は、殊に艶なる物也。源氏見ざる歌詠みは遺恨事也。」<sup>3)</sup>によって、歌人の中で『源氏物語』をはじめとする王朝物語が必読とされるようになったことが考えられる。この頃はすでに式子内親王(一一四九―一二〇一)の晩年にあたるが、和歌を俊成に学んでいたことを考慮すると、彼女が王朝物語を重要視していた可能性は十分にある。事

実、物語和歌を本歌とする歌をかなり多く詠んでいることを日笠由利氏が指摘している。<sup>4)</sup>日笠氏の指摘は物語和歌の本歌取りに留まっているが、『式子内親王集』の注釈書には、物語場面を本説として掲げている和歌がいくつも見られ、式子が積極的に自身の和歌に物語を取り込もうとしていたことがうかがえる。したがって、式子の物語受容の和歌を取り上げて検討していくことは、その歌風や作歌態度を明らかにするために重要なのではないだろうか。先行論には式子の物語受容について詳しく論じたものが少ないが、和歌における物語受容という観点から考察を進める必要があるのではないかと考える。

また新古今時代は、院政期の初めに堀河天皇に奏覧された『堀河百首』を嚆矢として、組題百首が確立した時期でもある。以後、新古今歌人達によって百首歌が盛んに詠まれるようになる。それは式子も例外ではない。『式子内親王集』は三つの百首和歌(慣例とし

てA百首、B百首、C百首と呼ばれている」と、「雖入勅撰不見家集歌」七十首前後の歌群（D歌群と呼ばれている）から成っている。現存する式子の歌はほとんどこの家集に載るが、D歌群の歌や勅撰集入集歌の詞書から、現存しているもの以外にも百首歌を詠んできた形跡がある。この家集に収められている百首歌については、村瀬早子氏が、A百首の四季部のみについての考察ではあるが、「詞による連想的な連関など、様々な方向から複雑に歌を連関させており、式子内親王が百首を配列し、全体に構造を持たせることを念頭において詠作していたことがうかがえる」と指摘している。つまり、式子には百首の歌を詠む（選ぶ）上でなんらかの配列意図があったことが推測できるのである。

そこで物語受容の歌についても、一首ずつ単独で考えるのではなく、百首歌を構成する一首であるということ念頭に置いて、配列という視点から考察を試みる必要があると思われる。本稿では特にA百首における『伊勢物語』受容の歌を取り上げ、その受容方法や前後の歌との連関について分析していく。

諸注釈書や先行研究において、A百首の中で『伊勢物語』との関連性が指摘されている歌は、

(四二) 秋はたゞ夕の雲のけしきこそそのこととなくながめられけれ<sup>①</sup>

(六八) 思より猶深くこそさびしけれ雪降るまゝの小野の山

ざと

の二首である。この二首に加えて本稿では、

(四一) 袖のうへは露の宿りと成にけりところもわかず秋たちしより

の歌も取り上げる。この歌と『伊勢物語』との関連性を指摘した上で、さらに配列を視野に入れつつ考察を行う。

#### 一 四一 番歌と『伊勢物語』第五六段

従来の研究では「露の宿り」という語句に注目して、『源氏物語』の次の二首が四一番歌の参考歌として指摘されている。<sup>②</sup>

浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき<sup>③</sup>

(賢木巻・光源氏)

いづれぞと露のやどりをわかむまに小篠が原に風もこそ吹け

(花宴巻・光源氏)

賢木巻の和歌は、桐壺院の崩御後、藤壺からも拒絶された源氏が参内もせず雲林院に籠っていた時に、二条院に残してきた紫の上にあてて詠んだ歌である。「浅茅生の露のやどり」という部分には、父帝が亡くなったこと、源氏劣勢の時流や藤壺のつれない態度など、この時の自らの置かれた状況や心情がこめられているのではないかと考えられる。そのような涙を流さずにはいられない、辛い世の中

に残してきた紫の上を心配する源氏の心が詠まれた歌である。前巻の葵巻で二人が新枕を交わしていることや、この和歌が詠まれている場面では紫の上に「女君」という呼称が用いられていることから、夫から妻にあてた歌といえるだろう。

花宴巻の和歌は、花の宴が催された夜、宮中で朧月夜と出会った源氏が彼女と一夜を共にし、明け方の別れの場面で詠んだ歌である。名を尋ねられた朧月夜は「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」と詠む。その歌への返歌である。この場面では朧月夜がやはり「女君」と表現されている。また朧月夜の歌に対して、秋貞淑氏は「やや挑発的な後朝の歌を自ら詠みかける」と指摘している。これらのことからこの歌は恋愛歌と解釈してよいだろう。「露のやどり」は、はかないあなたの住む場所という意味がこめられており、場所を示している。また左大臣家の婿である源氏と右大臣家の姫である朧月夜の恋の危険性をも暗示しているかもしれない。

対して四一番歌は、「袖のうへは」という初句からも「露の宿り」は涙で濡れる所の意が適当であろう。奥野陽子氏が指摘しているが、この歌は上句と下句が倒置になっており、「場所を区別することなく(すべての上に) 秋が立って以来」袖の上になで露が置くようになってしまったのである。奥野氏はさらに「秋の思いが、なにか人の側に特別な個別的な原因がなくても、自然に湧いてくるもので

あることを、涙を自然の露として表現することによって、表現している」と述べている。奥野氏の解釈通り、この和歌は秋の悲しさを表現した歌と解したい。その上で私は、この歌は先に挙げた『源氏物語』歌のどちらも受容していないと考える。なぜなら、「露の宿り」の語の意味が、そのどちらとも異なっていると思われるからである。

花宴巻の歌は、源氏が朧月夜にその素性を尋ねる歌であり、あなたの身を置く所の意が強い。一方で賢木巻の歌では、「露のやどり」に源氏の辛さ、つまり涙をこめているとの解釈が可能だろう。その点では、「露の宿り」が涙の置く場所である袖の上を指す四一番歌とも合致する。また季節も同じ秋である。しかし、賢木巻の歌では政治的に劣勢な源氏の境遇から「露のやどり」となっているが、四一番歌では、涙が流れるのは秋だからということではかない。そこには、辛い境遇や時流などといったものは一切踏まえられていないのである。もし『源氏物語』の歌を踏まえた語だとすると、その意味を違えてしまっているといえ、それは受容という観点から見ると拙いように感じる。

そこで、この歌の本歌として、先行研究では言及がないが、新たに『伊勢物語』第五六段の次の歌を指摘したい。

わが袖は草のいほりにあらねども暮るれば露のやどりなりけり<sup>12</sup>  
この歌と四一番歌に共通するのは、「袖」を「露のやどり」る所、

つまり涙に濡れる所としている点である。これは『源氏物語』の「露のやどり」を詠んだ和歌には見られない使い方である。この点から、四一番歌は『伊勢物語』第五六段の歌を念頭に置いて詠んだものだと考える。第五六段では、「ふして思ひおきて思ひ」とあるように、男は寝ても覚めても相手のことを思ってしまう状態にあり、ついに「思ひあまりて」歌を詠むのである。「袖」を「露のやどり」とする涙は相手への思いの表れである。また、草のいほりの「草」の縁で「わが袖」が露の宿る所だと表現している。対して四一番歌では、下句を「ところもわかず秋たちしより」とすることで、あらゆる所に秋が訪れていること——当然、草木にも秋が訪れている——を示している。だが、歌の中に直接「草」やそれに類する語句は用いられていない。これは本歌を踏まえたからこそその表現といえるだろう。

以上のことから四一番歌に関しては、従来指摘されている『源氏物語』歌ではなく、『伊勢物語』第五六段の歌を本歌と考えるべきであろう。

また歌の配列からも第五六段の歌が想起できるようになっていく。A百首において、この歌の前に置かれているのは次の歌である。

(四〇) ふきむすぶ露も涙もひとつにておさへがたきは秋の

夕暮

この歌では、「露も涙もひとつにて」と、露と涙が同じ一つのものであることが強調されている。和歌において、露は涙を暗示させ

るものとしてしばしば詠まれる<sup>13)</sup>。この歌ではそれが明示されている。この四〇番歌の前に置くことで、四一番歌において「露の宿り」が「涙に濡れる所」であるという意識は一層強く働くだろう。

そして続く四二番歌へのつながりからも、この四一番歌を『伊勢物語』受容の歌だと考えることができるのである。

## 二 四二番歌と『伊勢物語』第四五段

先行研究では四二番歌の本歌として『伊勢物語』第四五段の次の歌が挙げられることがある<sup>14)</sup>。

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのことなくものぞ悲しき

第四五段では、女が死の間際になり、男への思いを親に告げるが、男が駆けつけるとそのまま亡くなってしまふ。男は喪に籠り、宵のうち管弦の遊びをして過ぐす。夜が更けてやや涼しい風が吹き蚤が高く飛びあがる。それを眺めて男は二首の歌を詠む。その内の二首目がこの「暮れがたき」の歌である。なかなか日が暮れない夏の日は一日中なんとなくもの悲しい気持ちになるという意味であり、ここでの悲しさはもちろん、女の死に端を発するものである。

対して四二番歌は、秋はただ理由もなく夕方の雲を自然と眺めてしまふ、という意味の歌である。どちらの歌にも「ながむ」という動詞が使われているが、第四五段歌では「夏のひぐらし」を「なが」

めると、「そのこととなく」悲しい、と詠まれている。一方、四二番歌では「そのこととなく」（夕の雲）が「ながめられ」る、と詠まれている。両者には「そのこととなく」と「ながめ」の語の組み合わせに違いがあり、「ながめ」る対象も異なっている。さらに四二番歌では「ながめ」に助動詞「らる」が付き、自発の意味が加わっている。奥野氏は「そのこととなく」の語に関して「なにか目をひく限定された理由があるわけでもないのに、どこがどうというわけでもなくて、の意。秋の雲のけしきの不思議な吸引力をいう」と指摘する<sup>55</sup>。このことは「ながめられけれ」という、自発表現からもうかがえる。

この二つの和歌は一見すると関連性がなさそうだが、共通する語は「そのこととなく」、「ながむ」だが、これらだけで影響を指摘することは難しいだろう。女の死を悲しみ、夏の長い一日中物思いにふける心情を詠んだ『伊勢物語』第四五段の歌と、秋の夕方の雲にひきつけられる心を詠んだ四二番歌では、その内容にも重なり合うものが見つからない。しかし、第四五段のもう一つの歌を併せ見ることとて、この二つの歌を結びつけることができるのではないだろうか。第四五段には、「暮れがたき」の歌と共に以下の歌が詠まれている。

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

先述した通り第四五段では、女を亡くした男が晩夏のいま、一日中物思いに耽っており、もの悲しい気持ちで過<sup>56</sup>こしている。そこに

空高く飛んで行く蛩が見え、亡き人の思いを雁に託して欲しいと「ゆくほたる」の歌を詠む。雁は秋になるとやって来る鳥であり、第四五段では本文に「やや涼しき風吹きけり」とあるように、風に秋の訪れを感じている。

四二番歌で、自然と眺めてしまうものは「夕の雲」である。『歌ことば歌枕大辞典』には、「夕べの雲」が立項されており、「人を火葬にした煙が立ち上ってできると考えられた夕方の雲」、「ほぼ新古今時代の歌語」とある<sup>57</sup>。さらに『新編国歌大観』（CD-ROM版 <sup>58</sup> *nao*）で「夕べの雲」を検索すると、いくつもの用例が出てくる。その中から式子と同時代の歌人の歌を抜粋する。

れいならで、うづまさにこもりたるに日かずのつもるま  
まに、いと心ぼそうおぼえて

かくしつづふふべのくもとなりもせばあはれかけてもたれか  
しのばん  
（『周防内侍集』五三二）

雲のただよひたるをみて

それとなきゆふべのくもにまじりなばあはれたれかはわきて  
ながめん  
（『待賢門院堀河集』一三〇）

おなじ人に

こひしなゆくへをだにも思ひいでよゆふべのくもはそれと  
なくとも  
（『林下集』一三〇）

いつまでかこのよのそらをながめつつゆふべのくもをあはれ

ともみん

(『長秋草』一七七)

おもひいでよ夕の雲もたなびかばこれやなげきにたへぬ煙と

(『千載和歌集』巻第十五・恋五・九二一・右近中将忠良)

何となく涙ぞ落つる村雨のゆふべの雲になくほととぎす

(『御室五十首』二六七・釈阿)

思ひくらすながめはうはの空なればゆふべの雲のなつかしき

かな  
(『正治初度百首 上』五七八・源朝臣通親)

これらの用例からも、『歌ことば歌枕大辞典』の記述通り、「夕べの雲」は火葬や人の死と結びつけて詠まれる傾向がある。また、式子と親交があった俊成も「夕べの雲」の歌を詠んでいる(『長秋草』一七七、『御室五十首』二六七)。「夕べの雲」は「死」を連想させる歌語であるといえ、四二番歌にもそのイメージをあてはめてよいのではないだろうか。

四二番歌に詠まれた季節は秋である。『伊勢物語』第四五段の晩夏から、雁がやって来る秋へと詠み変えられているのである。亡き人の魂である蛭が飛んで行った空を、秋になってもなお見上げてしまう。第四五段の二首の歌を踏まえているとすると、この和歌はどのように解釈できる。つまり第四五段を思い起こすことで、夕方の雲に心惹かれてしまうという表現の背景に、亡き人を思う心を読み取ることができるようになるのである。またこの受容方法から、式子が読んだ『伊勢物語』第四五段は、歌が二首並んだ形の通行本の

本文であった可能性が高い<sup>17)</sup>。

しかし、先述の通り、四二番歌だけでは第四五段と結びつけることが難しい。四一番歌から『伊勢物語』と関連づけさせることで、四一番、四二番のつながりに『伊勢物語』受容の流れが生まれ、その連想はずっと容易になると考えられる。

### 三 六八番歌と『伊勢物語』第八三段・八五段

六八番歌の本歌として、先行研究では『伊勢物語』第八三段(あるいは『古今和歌集』巻十八)の次の歌が指摘されている<sup>18)</sup>。

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

第八三段は、前半では「馬の頭なるおきな」が惟喬親王に仕えていた頃の話が語られ、後半では正月の挨拶のため、出家した惟喬親王のもとを訪れる。比叡山の麓は雪が深く、親王も「いともの悲し」い様子でいる。親王のそばにいたいと思いつつも、宮中勤めの身であるため帰らねばならず、この歌を詠んで都へ帰る。親王が出家を断り、雪深い小野の地で悲しげな様子で暮らしていることが未だ信じられないという思いが詠まれている。

一方、六八番歌に詠まれているのは小野の山里の寂しい雪景色である。「思より猶深くこそ」という表現から、小野の山里が想像していたよりもずっと「さびし」い場所であることが強調されている。「雪降るまゝ」という描写からは、雪が存分に降り、さらに降り続

けるにまかせているという、雪に閉ざされた山里の情景が思い起される。

二つの歌に共通する語は「思(ふ)」と「雪」であり、どちらも和歌に頻繁に用いられる語句である。そのため、これだけで本歌と断定するのは早計である。しかし式子は歌に「小野」の地名を詠みこんでいる。地名を詠みこむことで、六八番歌から第八三段を連想することが可能になるといえる。そしてこの章段を踏まえると、雪に埋もれた寂しい小野の冬景色の中に、惟喬親王が佇む姿が浮かんでくる。また、次に置かれた六九番の歌には、深い雪の中に埋もれた庵が詠まれている。

(六九) 住みなれて誰ふりぬらんうづもる、柴のかきねの雪の庵に

この「雪の庵」は「六八の「小野、やまざと」にあると思わせる配列になっている」と錦仁氏が指摘している。<sup>19)</sup>

一方第八三段で、「馬の頭なるおきな」が小野を訪れたときの様子は以下のように描写されている。

正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでておがみたてまつるに、つれづれといもの悲しくておはしましければ(後略)

このように雪が高く積もっている様子や、その雪中にある「御室」

に参上することが語られている。雪の中の「庵」は第八三段を十分に想起させる要素であるといえる。

つまり、六八番歌単体では「小野」という地名から第八三段を連想できる。さらに、続く六九番歌の「柴のかきねの雪の庵」という語句が、改めて六八番歌の中に、第八三段に描かれている小野の場面をより鮮明に思い起こさせる働きをしている。

また、六八番歌は、『伊勢物語』第八三段だけでなく、第八五段の要素をも歌の中に取り込んでいるのではないだろうか。第八五段も出家してしまった親王のもとへ男が正月に「まうで」る話である。この親王が誰かは明言されていないが、第八三段との関わりから、この章段も惟喬親王を念頭に置いて書かれたものだと考えることができる。

第八五段では、男が昔から仕えていた「親王」が出家してしまう。男には宮仕えがあり、普段は参上できなかったが、正月には必ず訪れていた。参上した正月、「雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやまず」とあるように、雪がふりしきって止まない。皆は「雪にふりこめられたり」という題で歌を詠む。男は、

思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積るぞわが心なると詠む。親王のことを思っても、「身」を二つにわけることができないので帰らねばならない。目が離せないほど降りしきる雪が積もることが「わが心」であるというこの歌は、親王のもとから帰



りたくないという気持ちを詠んだものだと見える。「雪こぼすが」とふりて、ひねもすにやまず」という雪が降りしきっている状況は、六八番歌の「雪降るまゝの」という描写に重なってくる。

六八番歌は、第八三段を想起させるだけでは、寂しい小野の情景の中に佇む惟喬親王の姿をそのまま取り込んだ歌で終わってしまふ。しかし、歌の中の情景を雪が降りしきるものに変えることで、『伊勢物語』第八五段の内容をも包摂したのだと推測できる。そうすることで隠棲した惟喬親王を見つめる男の視線のみならず、親王の傍にいたいという男の心をも表出した、深みのある一首になっているといえるのではないだろうか。

ところで、前述の通り、『伊勢物語』第八三段の歌は『古今和歌集』にも入集している。『古今和歌集』では歌の前に、『伊勢物語』第八三段に似た内容の詞書が付けられている。

惟喬のみこのもとにまかりかよひけるを、かしらおろして  
をのといふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりた  
りけるに、ひえの山のふもとなりければ雪いとふかりけ  
り。しひてかのむろにまかりいたりてをがみけるにつれづ  
れとしていと物がなしくてかへりまうできてよみておくり  
ける。

わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは  
（『古今和歌集』巻第十八・雑歌下・九七〇）<sup>20</sup>

『伊勢物語』では帰り際に小野で詠んだ歌となっているが、『古今和歌集』の詞書では、帰京してから詠み送った歌となっている。つまり両者で歌を詠んだ状況が異なっているのである。六八番歌では、今まさに寂しい小野の風景を眼前にしているように詠まれているため、小野の地で歌を詠んだという設定の『伊勢物語』の方が典拠としては適当であろう。さらに六八番歌に第八五段の要素をも織り込んでいるとするならば、一方を『古今和歌集』から、もう一方を『伊勢物語』から受容したと考えるよりも、式子は「忘れては」の歌を『伊勢物語』第八三段から自身の歌に取り込み、さらに第八五段の内容をもその歌に反映させたと考える方が自然である。この点からも、六八番歌は『古今和歌集』ではなく、『伊勢物語』取りの歌であると考えられる。

#### おわりに

これまで『式子内親王集』A百首における『伊勢物語』受容歌を見てきた。それらの歌を一首ずつ細かく分析することで見えてきたのは、自身の和歌の中に物語世界を創り上げてゆく式子の巧みな詠歌方法と、百首歌の構成に対する鋭い目配りである。

四一番歌には従来、『伊勢物語』との関連性は指摘されてこなかった。しかし「露の宿り」という語句の用いられ方や、四〇番歌に詠まれている露と涙が同じものであるという流れを汲んだ歌であった



ことから、新たに第五六段の歌を本歌と認定した。

続く四二番歌は、一見すると『伊勢物語』第四五段を思い起こすことは難しいが、用いられている語句や詠まれた内容から、第四五段にある二首の歌とともに取り込んだ歌と考えられることを述べた。第四五段を呼び起こすことで重層的な歌になるのである。さらにその受容の仕方から、式子が第四五段を、歌が二首並んでいる形で享受していたはずであることにも言及した。

さらに、六八番歌は「雪降るまゝの」という表現から、これまでに指摘されていた『伊勢物語』第八三段だけでなく、第八五段の要素をも含んだ歌になっていると解釈した。

本稿で取り上げた式子の三首とも、その前後に置かれた歌とともに『伊勢物語』を呼び起こさせる配列になっていた。式子の百首歌については、先行研究ではA百首の四季部についてのみ詳しい考察が行われている。本稿での分析の結果、物語受容の歌についても綿密な配列意図のもと、百首歌の中に配置されているといえる。

このように『式子内親王集』のA百首における『伊勢物語』受容の方法は、物語歌のみならず、章段の内容や要素を繊細に反映させたものだと考えられる。また、一首ごとの受容というよりは前後の歌と併せることで、より強く『伊勢物語』を想起させる配列になっているといえる。近年の式子内親王研究においては、新古今の歌風の形成期の動態に位置する、構成的な詠法の歌人として彼女を捉え

直そうとする傾向がある<sup>(2)</sup>。A百首における『伊勢物語』受容の方法は、まさに構成的な詠法の歌人としての式子の一特徴を示すものではないだろうか。

本稿ではA百首における『伊勢物語』受容の考察に留まってしまう。今後はA百首のみならず、B百首、C百首それぞれにおける物語受容の歌に関してもさらなる分析・考察を進めていく必要がある。それにより式子の物語受容の方法や、百首歌の配列の特徴が明らかになり、さらには新古今時代の歌人としての個性がより鮮明になってゆくだろう。

#### 〔注〕

- (1) 藤平春男編「古今集新古今集表現事典」『別冊国文学』No.6 古今集新古今集必携(學燈社、一九八一年三月)「本歌(説)取」項(松浦朱実執筆)
- (2) 注(1)に同じ
- (3) 久保田淳・山口明穂校注「新日本古典文学大系 六百番歌合」(岩波書店、一九九八年二月)
- (4) 日笠由利「式子内親王の本歌取について」『学習院大学国語国文学会誌』二九号、一九八六年三月
- (5) 例えば『新古今和歌集』入集歌の「たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする」(巻十一・恋・一〇三四)は、詞書に「百首歌の中に、忍恋を」とあるが、この百首歌は現存していない。
- (6) 村瀬早子『式子内親王集』A百首歌の四季部に見られる構成意識について「『語文』一一五巻、二〇〇三年三月)

(7) 『式子内親王集』の引用には、石川泰水・谷知子校注『和歌文学大系 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』(明治書院、二〇〇一年六月)を用い、歌番号も同書に拠った。また、引用した和歌や物語本文には適宜傍線等を付した。

(8) 佐佐木信綱校註『日本古典全書 中古三女歌人集』(朝日新聞社、一九四八年)や久松潜一・松田武夫・関根慶子・青木生子校注『日本古典文学大系 平安鎌倉私家集』(岩波書店、一九六四年)、錦仁編『式子内親王全歌集 改訂版』(おうふう、一九八七年三月)が指摘している。

(9) 『源氏物語』の引用には、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(小学館、一九九四年三月)、『源氏物語②』(同、一九九五年一月)を用いた。

(10) 秋貞淑「歌という〈快樂〉―朧月夜の歌と身体」(『人物で読む源氏物語 朧月夜・源典侍』勉誠出版、二〇〇五年一月)

(11) 奥野陽子『式子内親王集全釈』(風間書房、二〇〇一年一〇月)

(12) 『伊勢物語』の引用には、片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年二月)を用いた。

(13) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年五月)「露」項(渡部泰明執筆)

(14) 『和歌文学大系 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』前掲注(7)、『式子内親王全歌集 改訂版』前掲注(8)

(15) 注(11)に同じ

(16) 『歌ことば歌枕大辞典』前掲注(13)「夕べの雲」項(佐藤恒雄執筆)

(17) 通行本『伊勢物語』第四五段の本文形態の特殊さ(男の詠歌が二首並んでいること、時間の上で二首目の歌が一首目の歌に先行していること)については、後藤康文氏が『伊勢物語』第四十五段考―その〈原形〉に

関する臆説」(『語文研究』一〇三号、二〇〇七年六月)で指摘している。また塗籠本では、「ゆく虫」の歌が第四三段、「暮れがたき」の歌が第四四段と、分かれた構成になっている。

(18) 『式子内親王全歌集 改訂版』前掲注(8)、小田剛『式子内親王全歌新釈』(新典社、二〇一三年十二月)、『式子内親王集全釈』前掲注(11)

(19) 注(8)に同じ

(20) 和歌の引用は『新編国歌大観』(CD-ROM版 ver2)に拠る。歌番号もそれに拠った。

(21) 石川泰水『式子内親王への視点』(『國文學 解釈と教材の研究』四二二巻一三三号、一九九七年一月)

―きたはら・さゆり、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学―